

リンゴのゆめぢ —無農薬で、出来てしまいました—



まほろば主人

宮下 周平

(仁木農場より)

リンゴの ゆめぢ

序

10月26日、リンゴの初収穫。

一昨年に植えた「マツカム」の樹。

今年、この若樹から38個も、たわわに実を付けた。

「若木にあまり実を付けさせ、負担をかけてはいけない」と、2/3摘果（間引き）した先達・斎藤さん。

春先、0・1テストで少しの肥料を施し、一度草を刈ったが、その後は何もせず。

ホッタラカシのまま、当たり前のように成った。

まことに呆気なく、苦労話もなく、ただ眺めるだけで、

こうも簡単に穫れて良いものだろうか。



歴史的収穫になるかもしれない

80年以上のりんごの古木大樹。
札幌市街地唯一のりんご園



しかし、その意味するところは、大きな収穫だった。
かつてない気付きを、このりんごは与えてくれていたのだ。

一、齋藤りんご園さん んごの縁

まほろばのりんご。
それは、札幌山の手の「齋藤りんご園」さんのお付き合いから始まった。

それこそ、まほろばの歴史と同じ35年。
園主の齋藤允雄さんは、言い得るとしたら「農の聖」。

淡々とした振舞いで、りんごと対話しながら共に年輪を刻んで来られた。老子の「知るものは、言わず」の境地を、静かに体現されていらっしやる。

七月のまほろば交流慰安会に、齋藤さんも参加下さり、剪定の基本を直に教えて頂いた。「主幹には実を付けない」「一個の実におよそ120枚前後の葉が、光合成で必要」等々。

幹枝や樹勢を一瞬にして見抜く眼力。70年の匠の技と心は、一朝一夕に成らない。

りんご栽培を悉く体解すれば、いかなる作物も易々として作れるという。

齋藤さんの作物は芸術品、美味で美しく芳醇だ。

二、マツカムのこと

その齋藤さんのりんごの中で、特段の私好み「マツカム」。

漬物大根の時期に、口にマツカムを頬張りながら各家庭に土大根を配達したものだ。

仁木にも移植したく、その若木を齋藤さんの山で育てて戴いた。だが、冬越えで鹿に食べられ、わずか一本しか残らず、その貴重な一本を戴いて育てて来たのだ。

雪害で、裂けたり折れたり、満身創痍の幼木に夢を託して3年目。

昨年は4個ほど実を着けたが、小さいうちに落ちてしまった。初めて付けた実は、成らせてはいけなかったらしい。今年は木も一回り大きく

なり、斎藤さんの剪定のお陰もあって、最後まで堪えて跡を残してくれ
た。

小さい頃、「旭」リンゴを木箱で預けられて食べ放題に食べたからだ
ろうか。「富士」が無かった頃、皮ごと齧りつく鮮烈な味と香り。

1890（明治23）年に、カナダ・オンタリオ原産で、カナダ出身の
ギップ氏により札幌農学校に寄贈されたのが始まりとされる。名は何と、
あの Apple 社の「McIntosh / マッキントッシュ」。和名は
明治25年に「旭」と名付けられた。中生のため、本州で栽培されず、広
く出回らない。

自分にとってリンゴと言えば、この「旭」が原点で、その系統の「マ
ツカム」はリンゴの王様である。

同じ明治23年、原産地ミズーリ州マツカムから導入されたのだろう。
だが今では、道内道外にも、この原種は残っていない。

軸が短く、擦れて正品に成りにくく、旬が過ぎ易いため、普及しなか
ったのかもしれない。

明治開拓期の初成りの感動が、今蘇ったような夢見心地、しかも無農
薬。

来春、穂接ぎして増やしたい。みなさん、あと3年、5年暫し待って下
さい。

三、防除なしの無農薬栽培

静かに迎えた収穫日。

思えば、春に0・1テストで肥料設計して周りに少々撒いただけで、



札幌農学校（現北海道大学）を舞台に、明治期、りんご開拓の歴史ストー
リーがはじまった。

後は下草を刈つての草生栽培（しかし、夏草は生えっぱなし）。

虫除けや抗菌効果の食酢や木酢液など一切葉面散布してない。

細菌忌避剤として植物由来の防除資材を樹木に塗布してない。

殺虫殺菌剤処理済の果実袋も掛けていない。廃油や鋳物油乳剤も使用せず。

日本農林規格（有機 JAS 法）では、この類の中には、許容するものや特定農薬の範疇に入るものもある。

厳密には、初めて無農薬で成功したのかもしれない。（完全無農薬で栽培されていらつしやる方がいらしたら、認識不足ですみません）

四、慣行農法からの転換の困難

この農園の片隅にあるサクランボの樹。

野菜で精一杯、構う暇がない。無論、農薬をかけるなど思いもよらない。この地の先代が40年ほど慣行農法をして手放すこと17年。主も居ないままの放任で、周りの農家にも迷惑もかけず、静かに今日まで生き永らえた。当初、木が荒れて病気や虫が付き、大変な状態だっただろう。だが、10年以上経過すると、野生に帰るように、周りの天然雑木と同化する。誰も見向きもせず、収穫もせず。収穫し



ないから、果実は落下してその木自体で循環する。落葉や下草が、樹木を自ら育てる訳だ。今年、慣行農法のサクランボ山を継承した新規就農者が、減農薬を試みて壊滅状態に陥ったという。

ここに入植してから4年、少しずつ収穫し始めたので、その分施肥してお返ししている。

故福岡正信先生は、若き横浜税関・植物検疫所時代、見性して大悟された。

それで伊予松山に帰郷帰農して、親父さんの蜜柑山を任されて栽培。そこで、「人為は不要、一切は無用」の悟りを、そのままミカン作りに応用したのだ。ところが、悉く失敗。病気は移る、虫は湧く、山は禿山のように、木を枯らしてダメにしてしまった。何年も無収入。一からミカンの木を植え直して始められたという。そこで漸く、無肥料、無農薬、無除草、不耕起が可能になったという。しかし、現実には、先生の庵がある向かいの自然山は、収穫出荷してはならず、ミカンは鳥の餌で、禽獣の楽園。環境と共生し、永續可能な自然循環が成り立っている。だが、収穫出荷している手前の蜜柑山は、適宜に施肥・管理して無農薬・有機栽培で成り立っていることは、あまり知られていない。福岡先生は、収穫する

作物の施肥が必要なことは、すべて解っておられたのだと思う。

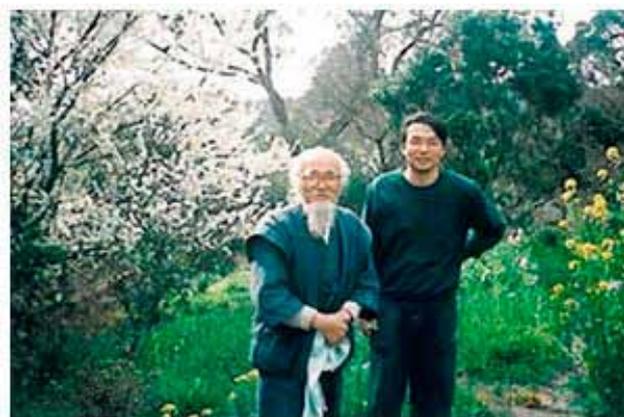
五、場と時の記憶

同じ畑の一角。

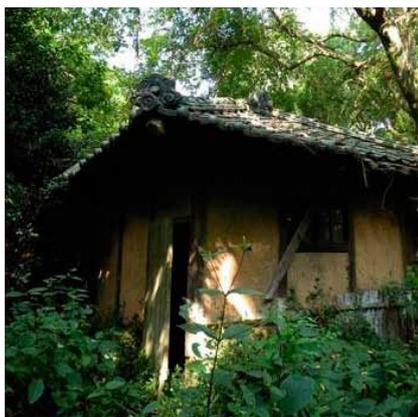
農園で栽培したスナックえんどうの発芽の様子。新しい種と更新種両つながら並んでいる。同じ品種、同じ土地でも明らかな差が出る。つまり、



開店創業以来35年、毎年入荷。感謝してもし尽されない。



91年の28年前、自然山での粘土講習会で。若かった。



「小心庵」福岡先生、終の棲家だった。



一年経てばその種は、その地の記憶、気候の記憶、栽培者の記憶、一切の記憶を押し込めて、一年前とは打って変わって、その地の種に変身するのだ。新しい情報がDNAに刻まれ、組み込まれる。二年経てば二年の種。十年経てば十年の種。百年経てば百年の種。

そのように、果物の木も同様に、前作までの記憶を再現する。本来、自力で害虫や細菌に打ち勝つ免疫力や賦活力を備えている。だが、農薬や防除剤を与えられると、自活力を発揮せずに持ち堪えられるので、それに慣れ、それに頼ってしまう。折角の生命力がDNAの底に隠れてしまう。

慣行農法で慣れた樹木が、過去の記憶を呼び戻すには、数年・数十年の歳月を逆行する必要がある。それなりの慣れ、時間と言う薬と治療が必要になる。そこに、無農薬栽培の困難話、歴史秘話が生まれるのだ。

しかし、最初から、その記憶を持たない種や苗木ならば、一足飛びに結実への最短距離・時間で行き着ける筈だ。

斎藤さんに戴いたリンゴの幼木は低農薬だが、今回の無農薬リンゴの結実を見て、そう思うのだ。

この畑全体に、農薬という概念が消えている。あつたとしても、過去の記憶として毎年薄れて行く。過保護に育成されたキャリアも希薄になっている。野菜を育てるように、果物もまた同じなのではないか。

六、環境の比重と原種の生命

最初、無農薬リンゴは実生栽培、種から育てないと難しい、と辺りを付けていた。

だが、低農薬の苗木でも成ったという答えは、何を物語るか。

遺伝子が先か、環境が先かの問いに、地質と施肥の環境要因こそ、より重要であるとの結論を示した訳だ。つまり、遺伝子さえも変えてしまう環境。それは「人は、環境の子なり」の教訓と同様いかように人も作物も変わりようがあるのだ。

さらに、自家採種して、種本来の生



き延びる生命力を奮い立たせるように、リンゴも原種に近いほど、種の起源を遡るような逞しい力を発揮するのではないか。

マッカムの他に植えた1868年(慶応4年・明治元年) 導入のバージニア原産「国光」(「富士」の親)や、同じ年オーストラリア原産「グラニースミス」の幼木が来年3年目、実を付けるものと期待している。

種も地も、二つ乍ら大事なのだ。

そして、その最大限の融合こそ、自然のダナミズムなのだ。そこに、生き活きと生きる原動力がある。

自然に交配して進化する種は、自然法爾で任せるよりほかない。

我が畑の雑菜の複雑さ豊かさ、南瓜の勝手な成り様。

嗚呼！大自然の造化、醍醐味の妙。



社長と専務が初試食の満足顔！

七、「原点へ遡り、 未来を拓く」

この拮抗力、結合力。求心力と遠心力。

人も作物も国も地球も、同じ原理が働いている。

同じ力が、対位のベクトルで、互いを助け、互いに伸びる。

これがイノチの輝きなのだ。

まほろばの「古を懐かしみ、明日を夢見る」。

「懐かしき未来」は、どんな人にも、種にも広がっている。



天空からのプレゼント、み使いのように思う「マツカム」に感謝し、今年の無農薬リンゴのささやかな収穫を祝福したい。

最後に、映画「降りてゆく生き方」の製作総指揮の森田貴英弁護士からコメントを頂きました。

八、リンゴの感想

宮下さんのリンゴは、我々が普段食べているリンゴとは「全くの別物」というべきものでした。

驚いたことに、無農薬なのに、虫食いが一切ありませんでした。

これは、リンゴの木が健全であり、抵抗力が強いので、害虫や病気を寄せ付けなかったことの証でしょう。

食感も違います。

普通のリンゴは、サクサクとした感じがしますが、宮下さんのリンゴは、もっと柔らかな食感であり、あえていえば、洋梨に近い食感かもしれません。今までにない食感です。

味は、スッキリとした自然で上品な甘みでした。

嫌味がなくて、いくらでも食べられる味わいです。

見た目も磨き抜いた漆器のような

深い光沢があり、

実に見事な外観でした。



卓上のマツカム。森田貴英 photo

弁護士 森田 貴英



「三点必致」 — トラクターと弓と神佛 —

三点必致



「、トラクター運転」どうして曲がるの?」「

今年になって、息子正大も居らず、機械の何もかも私一人が操らなくてはいけなくなった。子の旅立ちの段になって、俄かに総濼そうざらいたもの、物事の習得は、実戦でしか身につかないことを、いやというほど思い知らされた訳だ。

その一つに、農家なら誰もが乗るトラクターがある。

何処の畑でも耕すに、きれいにまっすぐ一直線に筋が通る、それが当たり前前になつていて、誰もがそう思っているに違いない。ところが、そう簡単に問屋は卸してくれない。真っ直ぐどころか、曲がりに曲がつて、恥ずかしいこと隠れたいほどである。(さあ良いゾ)と思つてもスタートで曲がり、(コレでOK!)と喜んで最後で曲がり、チョットでもハンドルを動かしてしまうと、途中でグニャグニャ曲がることこの上ない。

一、その原因は？

ところが、プロのメーカーさんにハンドルを握らせても、好きなように曲がりくねる。農家さんにやってもらつても、意外と曲がる。車好きでも必ず曲がる。何だろう、これは。半年、やってみて分かつたことは、

① この土地は、異常に石が多い。70年前に余市川が氾濫して大小の石が無数に埋まっている。それがロータリーの歯にぶつかり、中心線から見て左右に常に飛び跳ねて、ブレるのだ。歯の損失・変形で、バランスも崩し易い。

② そして、土地が波打っている。ジィーと中心に合わせているのに、どうしてもハンドルが惰性で持つて行かれて、戻せない場所がある。

③ 45馬力のトラクターだと、勘のみで真っ直ぐ走れる。高田さんは、お手のもので、実に見事だ。だが、半分の24馬力の新しいトラクターは車重が軽いので①②の原因で、お手上げなのだ。

④ 45馬力の昔のものは、ハンドルに遊びがあつて、手元の多少のブレも、線上には揺らぎを残さない。コンピューター制御の新型は、手元の微妙



な揺れが、明らかに軌跡となる。寸分の狂いも、見逃してはくれないのだ。今注目されているGPS（全地球測位システム）付きなら、以上の悩みは生まれないだろう。

さてどうするかだが、農園の種まきの曲がりくねりは、いかにも素人臭い農園で、見てもらうのも恥ずかしい。しかし、現状は隠せない。ありのままの素人農園である。それで、方法を様々に聞いてみて、自分に工夫してみた。

三、やまざまな方法論

最初、真ん中に線を引いてそれに沿ってまっすぐに走る。これが中々のもので、簡単ではない。そのタイヤの跡に沿ってタイヤを踏めば、良しとするも、これが意外とうまく添えない。場所にもよるが、①②の①②が関係しているのだろう、ズレまくる。

目的の中心線に棒を立て、それに合わせて車をまっすぐ走らせる。これは、真つ当な正論で走らない訳がない。ところが、そうは簡単にならないところ、地団駄を踏む。どうしてブレるのだろう、というほどブレる。Youtubeの動画で見ると、みなうまく起こしているのには感心するが、実際にそうはならない。果たして、プロ中のプロにやってもらっても、うちの畑でもああなるのか、と思うこと頻りなのだ。

四、自分なりの方法

ある夜、どうしても暗がり種撒きをしなければならなかった。翌朝

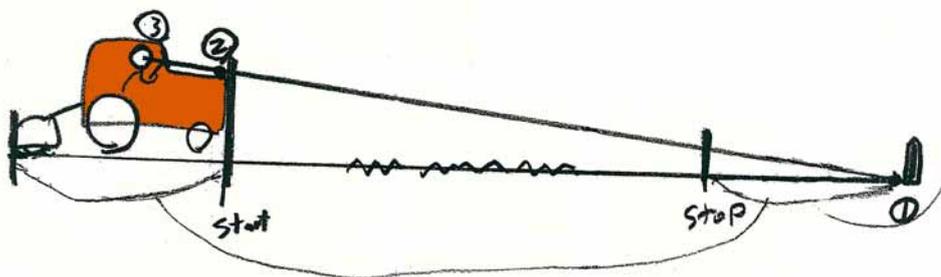


から雨降りだった為だ。この暗い中、気付いたことは、何事にもすべて意味がある、ということだ。

そこで、目的の中心線に棒を立て、懐中電灯で照らして、意識を集中することにした。

それと、最終地点より、何mか先に目的棒を立てる。まず車幅160cmの半分80cmで、まっすぐな棒を立てる。始発の後ろも半分を確認。しかも、揺らぐグラスファイバー棒でなくシツカリした木の杭と土との接点に焦点を合わせる。これを①とする。

②は、トラクターのボンネットの突起ポッチとする。これは車体の中心点だ。揺らいでも中心は揺らがない。しかし、これでもダメで、自分自身が左右に揺れると目線が常にズレる。そこで窓ガラスに中心線を引き、さらにベルトで体を固定する必要がある。これが③である。



③ツ目がブレると、①、②が一直線でも大幅にブレる。

何十年も耕作した畑では、こうはならないだろうが、石河原の果樹畑の跡を野菜に切り替えた土地は、条件が甚だ違うのだろう。そしてスタートは十分スタートラインから引き下がって中心線の真ん中に車体を合わせる事が肝心で、それをやらねば手元が狂って、最初から曲がってしまうのだ。そして、決して脇見をしない、後ろを向かないのが、原則だ。向いたと同時にハンドルも曲がるからだ。ジツと三点が最初から最後までブレないように息をのんで運転する。小刻みにハンドルを動かさないと、修正できない。そこで、線引きなしに自己感覚で進むと、必ず歪む。TPO（ロータリーの回転）を最大540までにして、速度は1km/hでユックリ着実に進む。最後まで、気を抜かない。これで初めて、真っ直ぐに行けた。万歳！

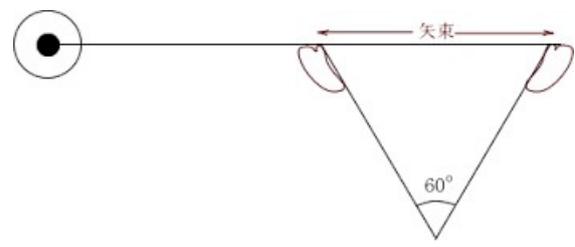
しかし、それはほんの最近、播種も終盤で分かったことで、確実に線をつ結べる。だが、まだまだ揺らいで本物でない。これに、慣れが加わる必要があるのだろう。

五、射法八節

先々月、作庭家の甲田さん御夫妻が、援農と0.1テスト習得に来訪し、連泊された。その際、奥様が高校時代から弓道を始められ、全国大会を制覇されたほどの腕前で、弓に嵌ったという。彼女の集中力、直感力は、この弓にも秘密があったわけだ。それで貴也さんのハートのど真ん中を射貫いたのだ。おそらく、集中の異次元時空の刹那に、自己の本体を垣間見るのだろうか。



今回、「弓の秘訣は何ですか」とお尋ねした。すると明快に「それは、射法八節です」と答えられた。その一つ、的と左の弓張の手元と右の引手が一直線上になることに、我が意を得たりとした。その他、吐や息や意識の生理・精神性に境の極意、道があるのであるが、まずはその三点一致の科学的整合性から始まるのではなからうか。それは、トラクター操作にも通じることで、人生万般、原理は同じであると確信した。

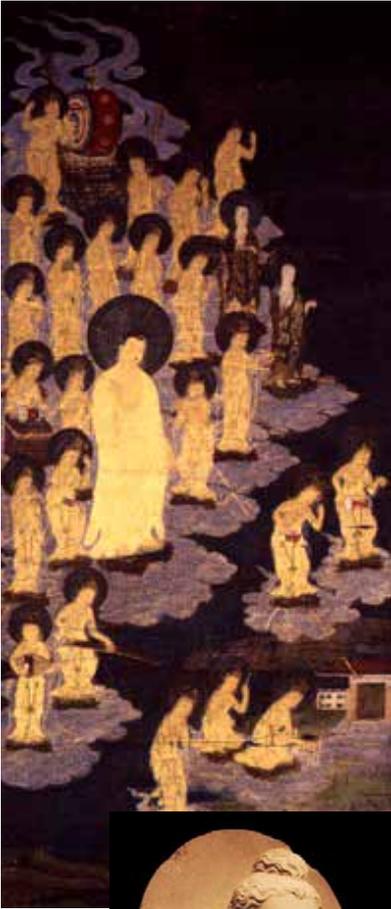
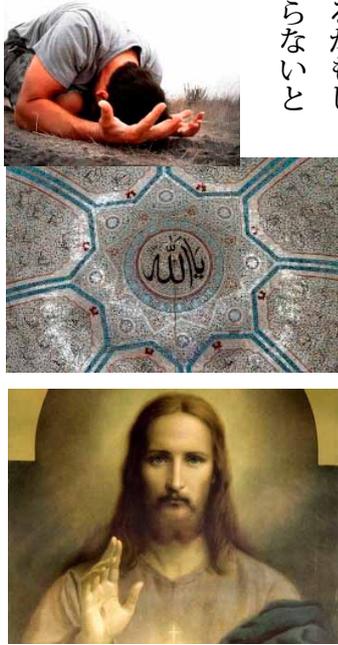


右上は、弓聖と称えられた阿波研造師。左は作庭家の甲田夫妻。「照葉樹林」の庭を手掛けられている。下は「射法八節」の図解。

六、三位一体

これは、眼に見えない信仰の世界でも同じではなからうか。

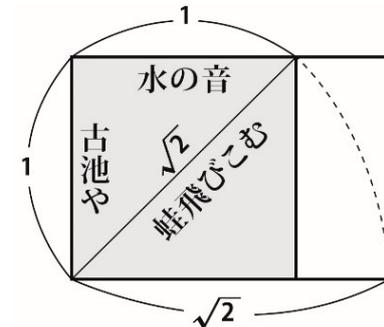
最初にキリストへの尊崇や信仰から始まり、そこに悩める自身が居て、イエスの向こうに父なるエホバが存在する。仏教の釈迦も信仰者修行者としての我が居て、やはり釈尊の先に真如や何々如来が在します。イスラームも信者ムスリム、預言者ムハマド、神アッラーも然りで、いずれも三点セットだ。どうも、この三角関係トライアングルは、物事の密接な関係を永続させる上で、どの一方二角も欠かせない力学的支点がある。物理的にも心理的にも。神、佛といつてもこちらの向き方によりの外れや回り道・横道をしているかもしれない、飛んだ邪教に陥らないとも限らない。そこを修正するのが教祖の教えにあって、究極の的に心向けさせるのだらう。



7、「三点必致の発見」こそ、人生の「コツ」

因みに、日本の俳句、5, 7, 5は、 $1 \cdot \sqrt{2} \cdot 1$ の白銀比。この三点比率で、自在絶妙な句境を生む。果ては銀河の外から、内は微生物の奥まで。そして、人の心の隠れた裏まで覗き込む。

勉学にしろ、仕事にしろ、趣味にしろ、ポイント発見が、物事の的を射るコツに違いない。余計な回り道をせず、中心を定めた一直線道は、思念が強まり、行動も早く確実に、最短距離を最短時間で到達する道なのだ。



自分の身の回り、確かめる。
 どうしたいのか。
 どうすればよいのか。
 いずれも、人生に付きまとう課題である。
 そして、「三点必致の発見」こそ、解決の鍵であった。

